

安東・北安東

あの日あの時
路地裏散策

文・中山 保氏(安東在住)



コラム

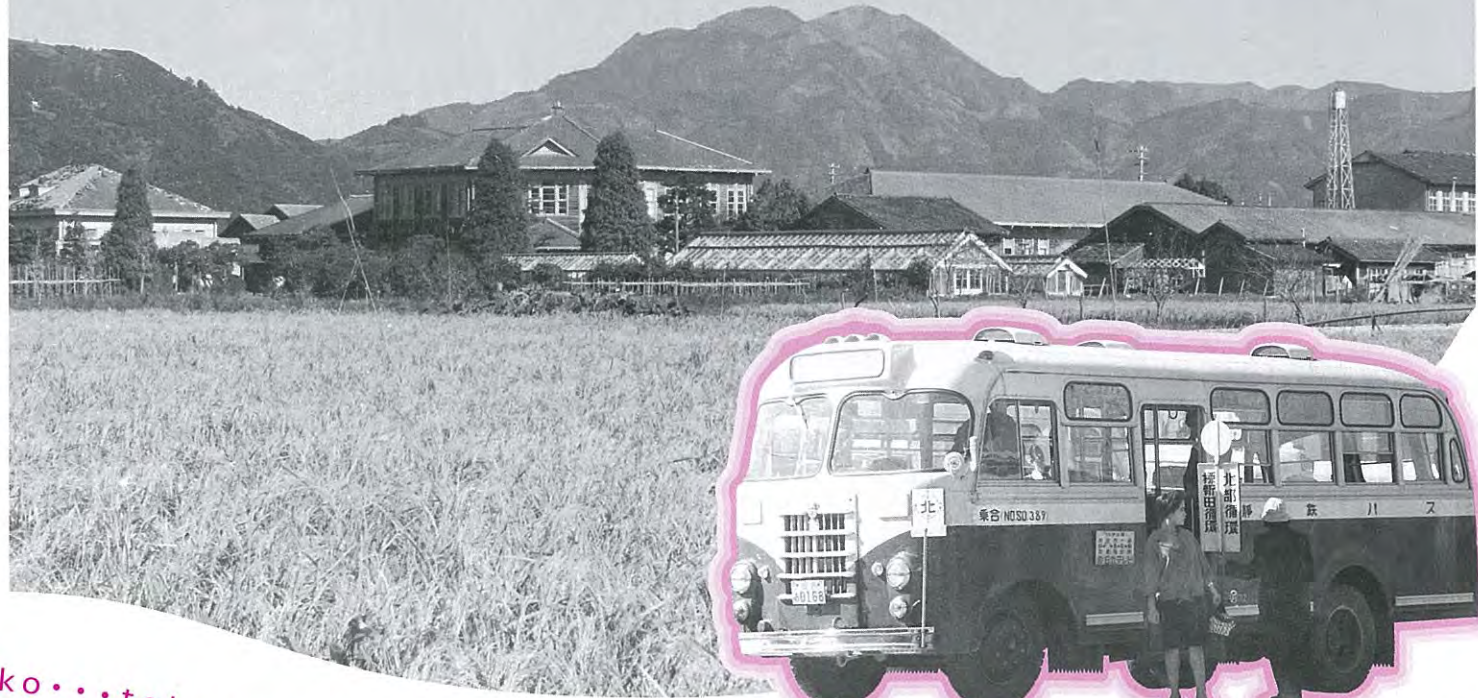
静岡の酒を誇りにできる
呑み手になろう
しずおか地酒研究会 主宰 鈴木 真弓氏

特集 静岡の地酒

Information

(財)静岡市文化振興財団インフォメーション
静岡科学館 る・くる

昭和二十九年 県慶祭試験場。現県立総合病院のあたり。



昭和二十九年
安東方面を走っていた北部循環バス

toko...toko...toko...toko...toko...toko...toko...toko...

その昔、南下してきた安倍川の水流は、賤機山の南麓、宮ヶ崎で、その一部が大きく左旋回して自由気ままに北上し、麻機沼、巴川から清水の海に流入しており、その湿地帯が、安東発祥の地であります。

往古、東進の古道は、浅間神社から安倍の市を右に見て、長谷国府―熊野権現―横田駅へと連なっていました。出雲族が東進の際、熊野権現創祀の適地として長谷の台地に奉祠したのが西暦700年初頭の頃で、ここを拠点に、農耕による集落を次々と形成していきました。

賤機山東麓、麻機古道に点在した大岩村、その南東デルタ地帯の集落、北安東村、併せて366戸をもって「安東村」が誕生しました。明治22年のことあります。

安倍川の伏流水は豊富で、幾条もの水溝によって田畑を潤しながら北上しており、十二双川はその代表的なもので、庶民の生活用水であり、また浅間神社、駿府城造営資材の運搬ルートでもあり、熊野権現の川でもありました。

熊野権現は、1300年の歴史を有し、紀伊浅野城主の庇護を受け、広大な社領と格式は、三島大社に匹敵したといわれ、徳川慶喜公ゆかりの神社でもあります。

昭和4年、安東村は全耕地整理を完了し、幾多の埋もれた史跡文化財とともに、村民から市民への、ほのかな憧れと、とまどいに、胸ときめかせて静岡市に編入されました。

開発の槌音とともに農村特有の伝承文化はまたたく間にコンクリートに埋め尽され高級住宅街に変貌、現在24ヶ町6000余戸で、安東地区が構成されております。

文教、医療、交通の要所で、多くの要人、名士が居住、人情細やかに、平穏、緑豊かな地域ながら、通勤族が多く、地域ふれあい、自治活動、また文化の次世代伝承に難点が窺われるのが、気がかりであります。

湿地帯

中山 保氏(安東丁目在住)

『北安東村』、『安東村』

安東 ando kita-ando 北安東

あの日のあの時

昭和二十九年
清水山頂より安東方面を眺望



昭和二十八年
城北通り



▼ 昭和十二年 城北高等学校 北安東校舎



▲ 城北高等学校の校舎全景

安東

TEKU・TEKU

北安東周辺

TEKU・TEKU



歴史あり、文化あり、遊びあり。
てくてく春の街角へ
さあ〜出発!!



01. 駿府薬園跡

徳川家康公は知る人ぞ知る医薬の大家であった。「和剤局方」などの処方集をひもとき、薬学研究に熱中していたようで、自身の健康管理はもちろん、三代将軍家光公、幼少の折の大病も家康公の薬で治したといわれている。
この駿府薬園は、江戸時代、約4,300坪、薬草木100余種を栽培していた。
現在、静岡信用金庫安東支店前に駿府薬園跡の碑が残されている。

安東1丁目

長谷通
静岡信用金庫 安東支店



02. 熊野神社

こんもりと繁る木々が、一見森を思わせる。老樟などのご神木が空をおおい、境内には、古社特有のバリッとした空気が流れている。
熊野神社に残された最古の棟札には和銅4年(711)と記され、紀州より東進した出雲族によって創建されたのではないかとされている。当時は、一万数千坪の境内を有し、三島大社にも匹敵する神社であったとか…』とにかく、由緒格式あること相違なく、安東の開拓は、熊野大神奉祀により始まった、安東の原点ともいえる神社である。
主祭神は、はやたまの命、いざなみの命、ことさかおの命で、更に12社を合祀している。この12社は、十二双川(かつては十二社川とも表記した。)の名前の由来にも深く関係し、一説には、「昔、12人の神様が熊野神社におられ、この神社の境内を十二双川が流れていたため」とある。ご神木の下に置かれた手水鉢は、かつて、十二双川の荷上場で、水の中に落としてしまったものを耕地整理の際、引き上げたのだとか。
現在、社宝のほとんどは散失し、京都御所から獲除けの神符を献上した際の礼状が現存するのみといわれているが、かつて、熊野神社には、獲除信仰があり、その神符の霊験は、京都禁裏まで知られていたことが伺える。
また、この神社は、徳川慶喜公にも愛された。散歩の折、よく立ち寄られたようで、慶喜邸建設の際には、境内の真木の木を邸庭に移植し、現在も、その真木の兄弟木が境内に、また、本殿裏には、慶喜公が寄進した木造の鳥居が残っている。



03. 安東村役場跡

安東1丁目、現安東県職員住宅の向かいに安東村役場があった。
明治22年、北安東村と大岩村が合併して安東村となり、初代村長伊藤忠右衛門氏宅を役場とした。当時、吏員は3名、世帯数は336世帯でのスタートだった。
昭和4年に静岡市に合併、村役場は個人宅として、平成10年までその姿をとどめていた。



文安 文吉

安東村役場の向かいに安東の名家豪農西谷家があった。安東文吉(1808~1871)は、その西谷家出身の任侠で、若かりし日には、江戸大相撲に入り、三段目まで上がった。末は、小田原から三河までの渡世人に威を示した大親分となり、文吉生存中は、清水の次郎長も駿府の町をよけて通ったといわれている。

しかし、「文キさん」と呼ばれたその人柄は温厚で思慮深く、生涯刀をぬかず、中味は竹光だったと伝わるほど。お縄になれば、首が飛ぶ渡世人も、文吉に命乞いを求めると理由を問わず、助けたそうで、「首つなぎ親分」と尊敬され、幕府からもその人柄をみこまれて、十手を預かっていた。
その「文キさん」の人柄を表すエピソードとしては…自らも、また子分たちにも大道を闊歩することを許さず、道の端を遠慮して歩いたとか、また、自宅での博打を戒めていた文吉は帰宅すると、決まって、家の裏で用を足し、咳払いを1、2回してから敷居をまたいだ。子分たちは、その音を聞いて、大急ぎで、花札を片付け、親分を迎えたそうである。
何とも心温まる、時代劇映画にでも出てきそうな任侠親分が、この安東の地にいたのである。



■安東十三ヶ町郷土誌

昭和66年に発行された「安東十三ヶ町郷土誌」。380ページにわたるこの郷土誌は、安東の神社・仏閣、自治組織、慣習、巷間史から公共組織の要覧までが掲載されていて、その様々な切り口に驚かされる。特に、戦前の村人の人情味あふれる生活慣習や村にやってきた物売りたちの芸達者な様子は、公の歴史には描かれない昔人の生活のにおいが感じられ、地元の人たちが手作りで郷土誌ならではの奥行きを感じさせる。
この本を中心になってまとめた故小林鏡一さんは、明治43年生まれで、文学青年で、短歌の同人誌や地元の歴史などを自費出版していた。この「安東十三ヶ町郷土誌」も小林さんがつれづれに綴った郷土史エッセイ「安東風土記」をもとに当時の町内会長さんが集まり、1年かけて、正確なものに整理したのだそうだ。
発行に携わった町内会長さんたちも、すでにほとんどの方が故人となられているが、本からは編集の熱意が感じられ、皆がこの土地に愛着をもっていたことが窺える。

04. 狐小路

安東1丁目15番と16番の間に曲がりくねった小路がある。
車の通り抜けもできない狭い路で、お昼に訪ねた時も周りの建物が陰をおとし、路の半分は日陰になっていた。近所のお年寄りの話では、40年くらい前までこの道には大きなお屋敷があり、草がぼうぼう生えて、薄暗く、怖かったというのだ。
実は、かつて、この路は「狐小路」と呼ばれていた。洗濯狐と異名をとった性悪狐が闇夜に限って現れ、溝の中から水をジャブジャブさせ、通る人に水をかけて、おどかした。このことは、洗濯狐が出たと騒ぎになり、皆この小路をさけるようになってしまった。特に、女性や子供は昼間もここを通らなくなってしまったという。
江戸時代の話だというのが、今でもこの小路は、ひっそりとして、曲がりくねった路の角から狐とはいわないまでも、何かひょっこり顔を出しそうな不思議な風情が漂っている。



現在の a 付近の様子

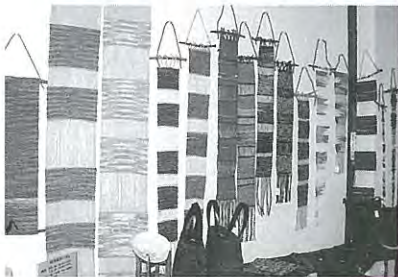
05.手織工房 ほっと

昨年9月にオープンした「手織工房 ほっと」。裂織りを中心に手織製品を製作・販売しているこの工房には、スタッフが作った手織製品のほか、色とりどりの織糸、木のテーブルと椅子、織機などが並べられ、暖かさとナチュラル感に満ちている。

裂織りとは、文字通り、古くなった布巾や着物の布を細く裂いて横糸として織り込んでいくもの。数センチの残り布も利用でき、今風に言えば、リサイクルだが、古布に手をかけ、別の織物として再生させる作業には、物を慈しむ気持ちが感じられ、織物に隠された時間が、製品に深い色合いと暖かさを与えている。

「ほっと」では、のれん、バッグ、マフラーはもちろん、「日常のニーズにあったものを使いやすく工夫したい」と携帯電話入れ、カードケース、名刺入れなども製作している。

「裂織りは、同じ糸を使っても作る人によって、出来上がりが違うのが面白い。どんな風



06.三越屋

「摩訶不思議」の看板が、目を惹くお肉屋さん。

なに、なに? コロッケ、チキンカツが50円!? コロッケはほくほくの具たくさん。チキンカツは20cm弱程の大きさがある。どれも国産のお肉を使っているので、しっかりお肉の味がする。

確かに、この値段は摩訶不思議! ご主人は、次から次へ肉やコロッケを揚げていき、お客さんはひっきりなしにやってくる。その光景もまた、摩訶不思議。

ちなみに看板の「摩訶不思議」の「儀」は、縁起をかついで、あえて人偏の儀をつかったそうなので、あしからず。



に仕上がるか、出来上がりがとても楽しみ」なのだそう。

興味のある方には、それぞれのニーズに合わせて、1日から長期の織物教室も開いているので、自分だけの裂織製品作りに挑戦してみるのも楽しそう。



現在のb付近の様子



安東3丁目

●市立安東小学校

07.十二双川

安倍川の伏流水が湧き流れ、巴川とつながる十二双川は、かつて、浅間神社石鳥居の石材や駿府城築城時の建設資材を運搬した運河で、「十二双川」とは、船が十二双並ぶほどの広さがあったことからの表記らしい。この川は、熊野神社との関係が深く、古くは、熊野神社の神官が禊をおこなった場所であった。熊野神社が十二社を奉じていることから「十二社川」の表記したこともあった。

さて、駿府城築城の際、建設資材は十二双川をせき止めて船で運ばれた。しかし、運行可能な水量に達するのに2、3日かかったので、その暇々に石工たちが、ありあわせの石でお地蔵さまを何体か刻み、川のほとりどころに祭った。かつて、十二双川の川岸には、たくさんのお地蔵さまが並べられていたそうだが、現在はほとんど不明のまま、一体のみ北安東五丁目の延命地蔵尊として祭られている。

さて、この十二双川に、とても注目している団体がある。「かつて、水郷であった静岡を再発見し、魅力的な空間を演出しよう」と活動する「水のまち静岡をつくる会」だ。会では、十二双川の見学会や藻を植える活動をしており、代表の杉山貞利さんは「転入してきた方から静岡は、乾いた街の印象があるといわれ、ショックを受けた。静岡にはいたる処に水の流れがあったが、今では、安倍川ですらあまり水がない。十二双川は、水の流れが唯一残る処。こういった場所を大事にして、水の流れ、水音を感じることでできる雰囲気のある街並みができれば…」と語る。



●安東二丁目公園



十二双川水門跡

安東2丁目

安東郵便局



十二双川

昨年行われた見学会では、子供たちが川に入り、そうした生き物を捕って楽しんだ。水の流れは、まさに心を潤し、清涼感を与えてくれる。現在、十二双川には会の植えた藻が揺れ、川縁を歩く人たちの目を楽ませている。又、十二双川沿いを歩きながら、目をあげると、所々に雄大な富士山を眺めることもできる。(view point参照)



1から見える富士山

富士山 view point

06

05

●静岡銀行 北安東支店

城 09.延命子安地蔵

安東二丁目、本要寺横の路地の入り口にある地蔵堂。明治の頃までは、雨乞い伝承も語られていたが、今は延命子安地蔵として祭られている。また、弘法大師もお祭しているそう。ご本尊は、木彫彩色の小さな地蔵尊で相当な時代物らしいが、秘仏として堂内に納まり、なかなか拝観することはできないそう。



08.GALERIE MIROIR (ガルリ・ミロワール)

版画を中心とした美術品の輸入・販売を手かける増田英世さんのオフィス兼ギャラリー。それがガルリ・ミロワールである。

「オフィス」や「ギャラリー」というよりもどちらかという「趣味の部屋」といった趣の空間は、良いお茶を飲み、良い音楽を聴きながら好きな作品を鑑賞できたら…という増田さんの想いを形にしたもの。壁にかかる作品はピカソ・ミロ・ドラクロワなどそうそうたるもののだが、美術館のような仰々しさがなく気軽に作品を楽しむことができる。

また、お茶とお菓子を楽しみながら版画作品を鑑賞し、その楽しみ方に触れる「アフタ

●本要寺

09

08

07



ンティー講座」も定期的に行われている。茶葉の実費程度で参加できるこの講座、常連客を中心にこちらでも版画作品を楽しむいい機会となっているようだ。

「まずはファッションを楽しむように気軽に楽しんでほしい。そして、お気に入りの作品を見つけたのなら、それを所有する楽しみもぜひ体験してほしい」と増田さん。高価なものでもなく、作品への愛着が湧くことで違った良さを感じられるようになるのだそう。そして、一つの原版から複数の作品が作られる版画は、1枚しか本物が存在しない絵画よりも作品と鑑賞者が1対1の関係を築きやすいものであるとのこと。

版画に携わるのは趣味・仕事の範疇を超え、「人生」なのだとおっしゃる増田さん。心底楽しそうな表情が印象的だった。

今でも出ている井戸水

富士山 view point



3から見える富士山

2 富士山 view point



11.鈴木ステンドグラス

教会や結婚式場で目にすることがあってもあまり身近にないステンドグラス。

そんなステンドグラスが身近に体験できるのがここ「鈴木ステンドグラス」だ。

「この場所に教室が移って3月でちょうど1年になります」と店主の鈴木剛史さん。

もともと竜南にある実家がガラス屋さんを営み、家業を手伝う傍ら、自らも「オダステンドグラスワークショップ」で学び、ステンドグラス教室を始めたとのこと。環境に恵まれたこともあり、自宅の作業場で作品を作っては友達への結婚のプレゼントにして喜ばれたことも。

同じ型の作品を作っても、選ぶガラス、組み合わせかたによって異なる表情を見せるステンドグラスは作る人の個性が現れ、とてもおもしろい。

「何度作っても決して満足出来るものがない、満足してしまったらそこで終わりですよ」と、まだまだ向学心旺盛で自らも絵画教室に通い、配色の勉強をしながら18名の生徒さんを教えている。教室ではレギュラーコースの他、簡単に出来る体験コースもあるので、まずはそこからチャレンジしてみたいか。きっとステンドグラスの魅力の虜になるだろう。



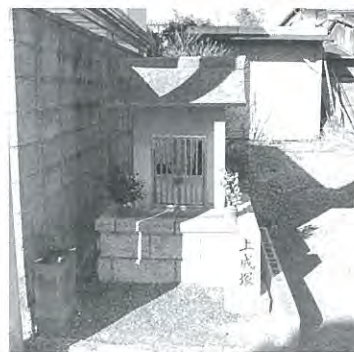
路地裏散策 Rojiura Sansaku

10.岩成不動

ここには、様々な言い伝えがある。

今川時代、武士の本妻と妾が争い、どちらかが死に至り、葬られた塚で、本妻が後妻や妾をねたんで打つことを「うわなり打ち」というので、「うわなり」がいつのまにか転化して「いわなり=岩成」とよばれるようになったというもの。また、婦人病を苦にして自殺してしまった良家の娘を葬った塚などの諸説がある。

戦前は、岩成不動に願掛けすると婦人病が治るといって、花街の姐さんや、ご婦人たちの参詣が多かったそう。



制服の あゆみ



明治36年頃

明治36年創立当初。和服に海老茶か紫の袴を履き、草履や下駄が多数だったが、創立からしばらくして靴を履く決まりとなった。髪型も、当初は日本髪（桃割れ・銀杏返し）が見られたが、次第に長い髪を後ろに垂らして結んだ束髪（まさ）が主流となった。まさに「ハイカラさん」。

ちよつと 一休み

昨年、創立百周年を迎えた静岡城北高等学校、その歴史の中で、女学生の制服の変遷をたどってみました。

女学生ふあしごよん史



大正15、昭和15年頃

大正15年から昭和15年は、セーラー服となった。冬服は紺色、夏服は青味を帯びた灰色に白い襟だった。髪型は大半がおかっぱ、髪がのびると二つに結んだ。その後、戦争前後の国民服を経、現在のブレザーにリボンの制服となった。



大正10年頃

大正10年に制定された制服。和服型の上着にスカート、黒の長靴下に黒靴を履く和洋折衷。布製バッグを斜めがけた。長い髪を後ろでまるめてピンでとめる「まるけ」という髪型が主流。

12.白髭神社・塩地蔵の痕跡

現在は、跡形もなくなってしまったが、かつて、「白髭神社」という神社があった。創建不詳の古社で、渡来民族奉祀の農耕神であった。江戸時代は、宝台院の鎮守として祭られ、明治になって熊野神社に合祀された。また、近くに「塩地蔵」と呼ばれるお地蔵さまがあって、これは、久能の塩売りたちが一服した場所に祭られていたとか。

白髭神社は、現静岡銀行北安東支店のあたりに、塩地蔵は現城北高等学校撫子館の横にある小さなお地蔵さまがそうではないかといわれている。



16.天神社

由緒、創立不詳。天神社というだけに祭っているのは、学問の神様、菅原道真公。2月半ばに訪れると梅の花が咲き誇り、飛梅伝説を思いおこさせる。

16



●静岡県環境衛生科学研究所
(財)静岡県生活科学検査センター

●静岡県赤十字血液センター

北安東4丁目



北安東3丁目

15.子育て地蔵尊

地藏堂に「子育ての恵みもふかき地藏さん心にかけてたのめひとびと」と御詠歌が書かれている。中には石のお地藏さまが祭られている。地藏堂の横には庚申塔がたっている。



北安東2丁目

〒北安東郵便局

13.暮らしの器 クラフトイブ

家庭で普段使うお皿やカップなどを扱っているお店。店内にある器は普段気軽に使えるようにと手ごろな値段でオシャレなものが並んでいる。これらは、オーナー自ら全国の手作りの品を見て回り、場所や作った人物にこだわらず、使う人に満足してもらえるものを選び仕入れをしているという。

店内には喫茶コーナーがあり、手作りケーキがこの店のオリジナル。日替わりで数種類(1日1食べながら、オーナーに器についてのアドバイ
なお、期間によっては、手作りアクセサリーなどの展示が行われることがある。4月12日~17日
めん作りの五月人形展が行われる予定だそうだ。

12

や紅茶を楽しむことができる。特に手作りケーキは~2種類の販売になっている。ゆっくりケーキをスを受けてみるのはいかが?
や人形な日には、ちり



●県立静岡城北高等学校

●コープしずおか城北店

●市立安東中学校



北安東1丁目

17.布あそび 馨花(KEIKA)

「こんなこと言うと、ちりめん細工のイメージを壊すかもしれないけど(クスッと笑って)…、見る人によっては、私の作品は“コワイ”とおっしゃる方、結構いるんですよ」とさらっと言うのは創作人形作家の松田圭子さん。

松田さんを知るには何はともあれ、まずは作品拝見というところでの、この一言。と言うことは、私達がイメージする、柔らかくって、愛らしい、こま犬ちゃんや、兎ちゃんの顔や頬がこげ、目が引きつったりしているわけ…?

見て納得。その“コワさ”とはビジュアル的に細工を施しているからではないのと言うまでもなく、作品が醸し出す雰囲気からくるもの。人形たちは今にも動き出しそうで、また、何か話しかけてくるのではないかとさえ感じる。「古布をできるだけ切り刻まないようにしながら、いかに古布の持つ風合いを生かすことができるのかを考えるのが一番大変」と言うように、その計算された衣装が更に目をひく。実際に人形のサイズに合わせて衣装を仕立て、着付けされているので、袖からでる手の指先、首すじがすごく艶っぽい。

どうしてこんな風に情感を表現できるのか? 「技術的なことを言えば、細部までこだわって作る。それには妥協しない。でも後は気負うことなく流れのままですよ。だから毎日の感情が作品に出てしまうんですね。楽しい時があれば、つらい時もある。それら日々の積み重ねが作品をカタチ作るのかな」



作品に向き合う松田さんが自然体で、そして真摯な姿勢で取り組んでいるからこそその表現なのか。

冒頭の言葉のつづき。「…“コワイ”と感じてもらえることは、作品を通して見ている人の心に伝わっているということ。だから素直に嬉しい」クスッと笑った理由がここにあったのだ。

セイフー 静岡城北店

18.カフェ マリの家

北安東の住宅地の中、緑に囲まれた赤いドアのお店。自宅を改装したこのカフェは玄関で靴を脱ぎ、お宅、いえいえお店に上がる。板張りの床に、栗木の一枚板でできたテーブル、椅子、ソファが置かれ、ガラス窓から光が差し込んでいる。冬訪れた時は、BGMのない店内にストーブの音だけがシンシンと聞こえ、親しい友人の家にいるような緩やかな時間を楽しんだ。

すべて手作りの軽食とデザート。オーナーの工藤ちる子さんは「作ることにこだわっているのではなく、好きだから作らせてもらっている」そして、「家が大好きだから、このお店を開いた」のだと笑う。

窓から見える庭には、メジロなどの鳥たちがやってくる。そして、鳥の運んだ種から緑が繁るのだとか。このお店では、そんな緑を眺めながら、ゆっくり時を過ごしたくなる。



19



20.天然酵母パン工房

Louise Odier (ルイズ・オーディエ)

入口にスタンドグラスで「天然酵母パン工房」と。何をやっているのかになり中を覗くと、そこには素敵なお庭が広がり、奥に進むとこだわりのパンを販売しているお店があった。

こちらのお店のパンは無添加・手作りにこだわったもの。原料の小麦は無農薬で国産100%、砂糖も一切使わず天然の酵母で甘さを引きだしているという。その他の材料も安全性にこだわり、オーガニックであるものを厳選して使用しているとのこと。そうお話しくださったのは、こちらのオーナー伊藤三枝子さん。

安全で健康にいいパンを作りたいという思いから、最初は趣味でパン作りをしていたそうだが、それがご近所やお友達に口コミで広がり、今では一般の方に販売するまでに至ったそうだ。熱心なファンが多く、開店から1時間あまりで売切れになることがほとんどか。中でも人気なのがマクロパンで、これは砂糖・卵・乳製品を使わず、天然酵母と小麦など自然のうまみをいかしたパンだそうだ。(こちらは予約販売のみ)

また自然に沿った生き方を推奨するこちらのお店では、パン作りの他にも自然農園もやっており、希望者に農地を貸し出し無農薬の野菜作りをしているそうだ。

お店は水・木曜の13時から。売切れ必死なので興味のある方はお早めどうぞ。



21

延命地藏尊
かつて十二双川沿いにあったといわれているお地藏さま



22.駄菓子屋さん

なつかしいお菓子やおもちゃが並んだ駄菓子屋さん。店名はなく、ご近所では、昔、くじを売っていたから「くじや」と通っている。店を開いて40年。店主のおばさんによれば、駄菓子屋も子供の生活もめまぐるしく変わったとか。「最近の子供はあまり遊ばなくなった。塾やサッカー教室で忙しい、駄菓子屋も平成になってずいぶん減ってしまった」そうだ。なんだか寂しい話だけれど、駄菓子屋を求めて遠くから訪ねてくる人もいて、駄菓子屋の定番、おでんも健在だ。



22

4
富士山
view point

21.ビーズショップ クレール・ビジュ

女性なら子供の頃、ビーズに糸を通して、ネックレスやブレスレットを作った思い出があるはず。小さくて色とりどりに光るビーズは、眺めているだけでも胸がときめいた。

ビーズショップ「クレール・ビジュ」ではビーズ作品の製作販売とビーズ教室を行っている。お店のオーナーで、ビーズ教室講師でもある出敏子さんと友井美代子さんも子供の頃にビーズにはまったのだとか。

ビーズは、その透明感と光に反射するガラスの特性で、どんな色の組み合わせをしてもなじんでいき、思いもかけない組み合わせができるのが魅力。確かに、同じ形の作品でも、ビーズの組み合わせでまったく違うニュアンスを表している。教室に通う生徒さんも、ビーズの組み合わせを真剣に考えていた。

生徒さんによれば、「1回の教室で、1作品ができ、それを身に付けられ、お友達にいわねと言われるのがうれしい」のだそう。小学校2年生から80代までが通う教室だが「シニア教室の方が教室に通うことにオシャレ

になっていくのがうれしい」と出さんは語る。また、子供たち、中には男の子がお小遣いでビーズを1粒ずつ買っていく、宝物にしているというかわいらしいエピソードもあり、きれいなものは、老若男女問わず、人の心を豊かにとくめさせてくれるのだと改めて感じさせられる。

店内には、ネックレス、指輪、髪留めなど様々な作品が並んでいるが、これらは、すべてサンプル。身につける人にあわせて、色や大きさを考えて新しく作ってくれるそうで、自分だけのオリジナル作品を手に入れられるのもうれしい。



19.三之宮神社

大山祇神、天照皇大神、建速須佐之男命を祭る三之宮神社。

大山祇神は、伊邪那岐尊・伊邪那美尊の間に生まれ、木花咲弥姫の父にあたるそう。大山祇神に詣ると、家内安全、開運、延命、長寿、厄除けの功德があるそうです。



24.Mio Strings(ミオ スtrings)



喫茶「陶路」でティータイムコンサートを開いている「Mio Strings」(美尾ストリングス)は、美尾洋乃さん、洋香さん姉妹が2001年に結成したヴァイオリンデュオ。結成した当初は、名前もなく、突然、お店に出かけて行って、弾かせてもらったそうで、本屋さんで弾いたり、クリスマスのケーキ屋さんで、5時間弾きつづけたこともあるそう。「どこでも、弾く」、この「Mio Strings」のスタイルは、「生活の中に生の音楽が流れてほしい」という二人の思いから。

姉の洋乃さんは、東京を中心に活躍。妹の洋香さんは、北安東の自宅中心にヴァイオリンの指導をしている。洋香さんは「ヴァイオリンに対するイメージが、皆少し固く、高尚な楽器だと思っているよう。ヴァイオリンをもっと身近に感じてほしいし、自分たちの音楽も自由にリズムをとったり、フランクに素直に聞いてほしい」という。生の音楽にこだわる理由は「音楽は、CDからでもその良さは伝わるけれど、生の音楽は、人が演奏している息遣いが伝わり、更に心を和ませ、元気にしてくれる」から。そして、教えることについても「ヴァイオリンを弾き始めるきっかけは人それぞれ、その瞬間に立ち会えるのもうれしい」と語ってくれた。

今年は、「陶路」の春夏秋冬のコンサートなどに加え、結婚式・お誕生会への出張演奏も開始した。二人の笑顔から音楽がこぼれ、街のあちこちでイキイキとした演奏が聴けそう。



●ジョイフル東海 唐瀬店

●しずおか信用金庫 竜南支店

23.陶磁器・喫茶・ギャラリー 陶路

外見は普通の民家。でも、一步中へ入るとコーヒーの良い香りが漂う。玄関でスリッパに履き替え奥へ進むと、落ち着いた木造家屋に懐かしさを感じる。

もともとは太田町にある創業100年の陶器店。平成12年9月、北安東の家を改装し陶器を扱う喫茶店としてオープンした。築50年になるこの建物は、店主の笠井京子さんの生家でもある。

玄関入って右手には、有田焼、鍋島焼他、日本各地の特色ある器が並んでいる。陶器を扱うプロが選んだだけあって、品のいい器が揃っていた。展示スペースには、五代、六代の佐藤走波の器があった。

喫茶スペースは玄関左手にある。カウンターの後ろには色とりどりのカップが並んでいた。コーヒーを注文すると、その中から1つ選んで出してくれる。使っている器はもちろん、室内のランプの笠、壁にかかった陶額、庭の置物等も購入可能とのこと。

アンティークな雰囲気の中で静かにコーヒーを味わいながら器を眺める。和食器好きにはこたえられない空間だ。



清流名高い、我が静岡

『酒を知るといことは、人を知ること…』

「地酒」と聞いて何を思い浮かべるだろう。酒蔵で作業する杜氏さんの絵だろうか。素朴で暖かいイメージだろうか。いずれにしてもナショナルブランドの日本酒が多く流通している昨今、あまり「地酒」を意識することは少ないかもしれない。しかし、日本酒のようにその土地その土地固有の物が存在し、さらにしっかりと息づき全国に流通している物は実はそれほど多くない。全国には2000あまりの蔵元が存在し、清流名高い我が静岡県には30あまりの蔵元が存在する。

静岡市北安東在住のコピーライター、鈴木真弓さんが主宰する「しずおか地酒研究会」は、静岡の地酒振興のための活動を行っている会である。県下の蔵元さんへ見学に行ったり、様々なゲストを招き酒文化について話し合ったりと積極的な活動を展開している。

「静岡の酒との出会いは取材先だったんです。」と鈴木さんは話す。取材先で出会った静岡県の吟醸酒に感動、「これは面白い」とさっそく蔵元さんや酒関係に携わる人たちにアプローチ。何の肩書きも無いライターのアプローチに最初は戸惑った蔵元さんたちも、徐々に協力してくれるようになった。

その後、鈴木さんがプロデュースを務めた静岡市南部図書館の食文化講座「静岡の地酒を語る」をきっかけに、しずおか地酒研究会が発足。現在120名ほどの会員が在籍しており、その中には東京などの県外会員もいる。

興味深いのは本来生産者である蔵元さんも自ら会に参加し、消費者と同じ目線で日本酒を語っているところである。特定のスポンサーなどを持たない緩やかな連携を維持しつつ、自由に活動している点はまさに「協働」と呼ぶにふさわしい。

鈴木さんによると「酒を知るといことは、人を知ること」なのだそうである。なにかと食品不安が強い現代、造り手と直接話す事によって信頼関係を築けるのは消費者にとって非常に大きな意味を持つ事と言えるだろう。もちろん、造り手にとってもそうである。

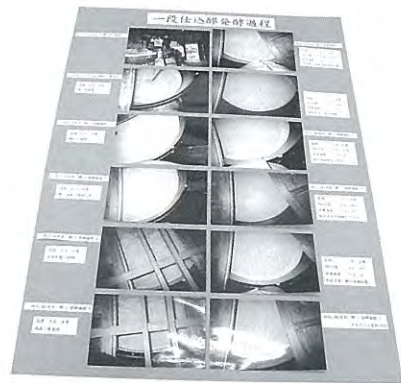
しかし、この「出会い」はこと日本酒においてはそれ以上の意味を持っている。日本酒の製造技術は長い年月を経てほぼ完成されており、基本的な製造工程自体に蔵別の違いは少ない。従って味が変化するのは仕込み水や蔵の規模、また精米法や酵母の発酵のさせ方などの造り手の手間のかけ方次第と言うことになる。そういった手間のかけ方を目の当たりし、蔵元で仕事をされる人に実際に会うことが、つまり人を理解することが、結果的に酒を理解することにつながるのである。

色々な出会いを通して地酒に親しむことで、蔵元にもフィードバックされ、最終的に飲み手造り手を含めた酒文化全体の振興になるのが喜び、と言うしずおか地酒研究会。その先にはさらに素晴らしい出会いが待っているに違いない。

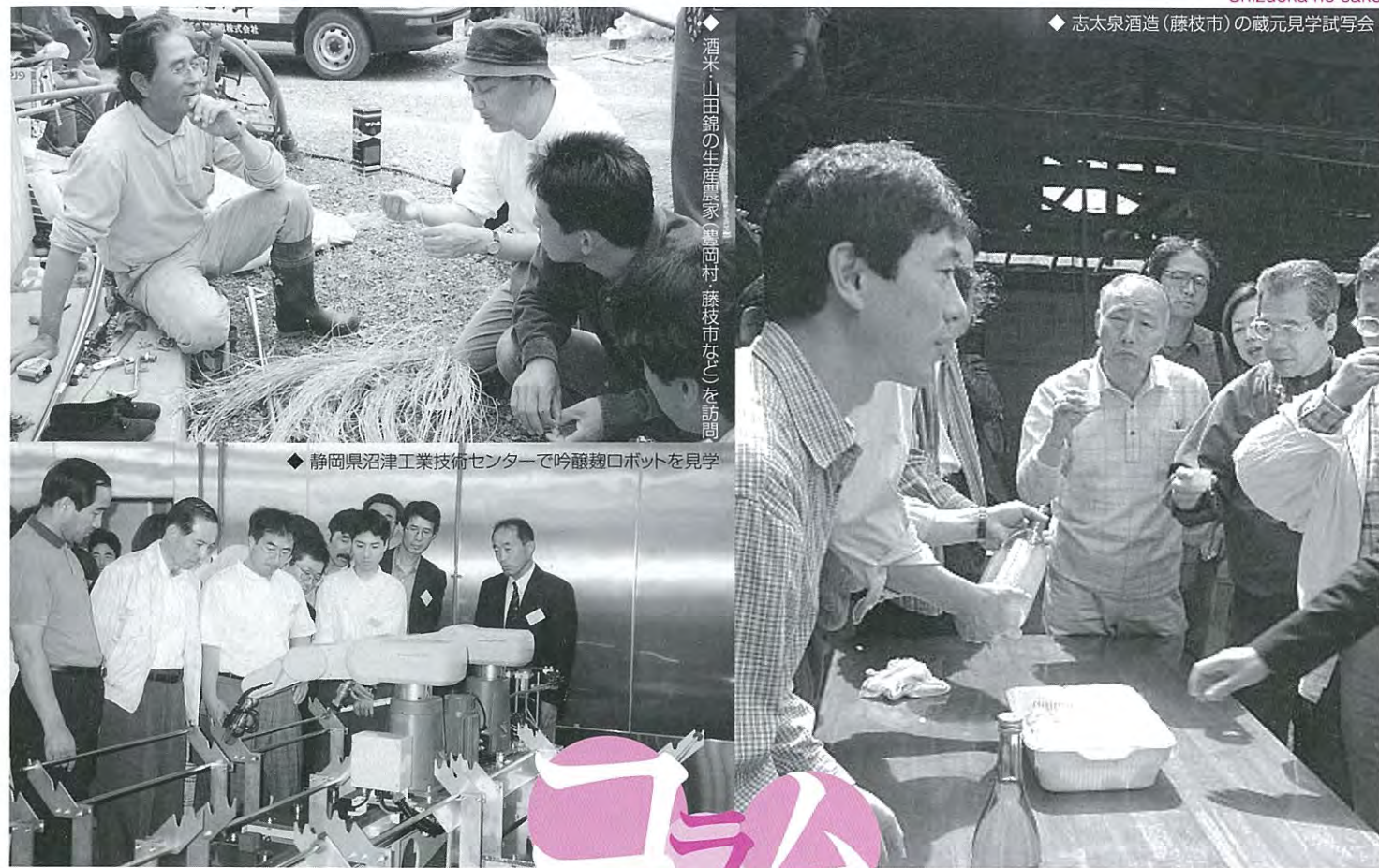
しずおか地酒研究会は、今年4月より開催される浜名湖花博の主催者パビリオン「庭文化創造館」において、地酒のワークショップ行う事になっている。しずおか地酒研究会の「人・酒との出会い」はまだまだ続きそうである。



▲「富士高砂酒造(富士宮市)の見学」



「お酒ができあがるまでの工程写真」



◆酒米・山田錦の生産農家重岡村(藤枝市など)を訪問

◆静岡県沼津工業技術センターで吟醸麹ロボットを見学

◆志太泉酒造(藤枝市)の蔵元見学試飲会

コラム

静岡の酒を誇りにできる呑み手になろう

コピーライター/しずおか地酒研究会主宰 鈴木真弓氏

静岡県は物流の盛んな地域で、日本全国からいろいろな物産がもたらされ、地元の産物を誇りにし、優先的に消費するという土地柄ではありません。地酒も、県内で消費される日本酒の15%程度しか飲まれていません。地元の酒蔵は長年、生産の大半を灘の大手ブランドへ桶売して生計を立てていました。しかし昭和40年代後半から灘の桶買いが減り、自立をするか、廃業するか、まさに構造改革の矢面に立ったのです。

昭和50年代に入り、静岡県工業技術センターで新しい清酒酵母が開発され、量より質で勝負しようという酒蔵の技術的支援が始まりました。そして昭和61年全国新酒鑑評会で金賞10、入賞7、入賞率日本一を獲得し、酒造業界に革命をもたらしたのです。静岡酵母と呼ばれる県開発酵母で造られた酒の特徴は、さわやかなリンゴやバナナのような香りが立ち、味はすっきり軽く、後味がきれいでスマートな味わい。それまでにない新しい吟醸酒のスタイルを確立したのです。地方の研究機関が開発した酵母でこれほどの成果を上げたのは、静岡酵母が初めてでした。

静岡酵母の酒は静岡の水が軟水で発酵が緩やかになるという特徴も活かしています。酸が低く軽い味わいなので、淡白な駿河湾の海の幸によく合い、食事中も壺が進み、またフルーツを思わせる上品な香りは女性や若者など日本酒初心者にも楽しんでいただけます。全体にライト感覚になっている日本人の食の嗜好にもマッチします。

昭和63年には3割ほどだった静岡県の特定名称酒(吟醸酒・純米酒など)の製造割合は、平成に入ってからグングンと伸び、今では7割を超えています。特定名称酒の大きな特徴は原料米の精米率に厳しい条件が付けられていること。各蔵元は原料コストがかかっても量より質で勝負するという体制で努力しているのです。ちなみに、米の外側のたんぱく質や雑物質にはアルコール分解を妨げる成分が含まれています。特定名称酒はこれを多く削り取って使用するため、悪酔いしにくいという利点があります。またアミン類など蒸し香(口中で臭くなる香り)のもととなる物質もそぎ落とされるので、酒臭くなりやすいといわれます。

静岡酵母が開発・成功して以来、全国各県、各地

域で独自の酵母開発がさかんになりました。個性的な地酒が増えるのは楽しいことですが、全国新酒鑑評会で賞を取るためにより派手な香り、インパクトのある味を出す酵母が使われるようになり、呑んで美味しい酒、壺が進む酒とは程遠い、コンテストのために厚化粧したような酒も増えてきてしまいました。静岡県の蔵元でも静岡酵母だけを単独に使う蔵は少なくなり、他県の酵母、数種類の酵母を独自ブレンドする蔵が増えてきました。

静岡県の鑑評会では少なくとも、静岡酵母が開発された当初の目的である静岡の気候風土や食文化にマッチした酒を見直そうとの反省から、独自の審査基準を設定しています。

静岡県清酒鑑評会一般公開では、県内の蔵元全社の新酒が無料試飲できますので、興味のある方はぜひいらしてください。そして、静岡の地酒はこういう味だと、静岡県民が誇りに思えるような酒を、造り手と呑み手が共に考えられる機会を増やしていただきたい。造り手が身近に在る地酒だからこそ出来ることです。県内で開催される蔵元や酒販店が主催する地酒イベント、または当会のような愛好者の集まりなど、チャンネルはたくさん用意されています。

*静岡県清酒鑑評会については静岡県酒造組合まで
お問い合わせ 054-255-3082



◀「日本の大吟醸」「杜氏という仕事」(ともに新潮社刊)の著者・藤田千恵子さんを招いて



しずおか地酒研究会 静岡市立中央図書館
「地酒と食」もてなし

杜氏

水

米

地酒

静岡科学館 る・く・る

3/21 SUN
OPEN



あふれる科学館

創造する楽しさに

発見する喜びを

キーワードは、

「みる・きく・さわる」を

科学館を
New・View

「あれ?」「どうして?」

静岡科学館る・く・るには、あなたの好奇心を刺激する展示物がたくさんあります。

みて、きいて、さわって、ふだん感じることができないふしぎな世界を体験してみよう。

入館料

小 人	中学生以下	無 料
大人(個人)	15歳以上※静岡市内在住の70歳以上は無料	500円
大人(団体)	20名以上	400円
定期入館料	有効期限:発行日から1年間	3,000円

■開館時間/AM9:30~PM5:00(入館はPM4:30まで)
■休館日/月曜日(休日を除く)・祝日の翌日(日曜日を除く)・年末年始(12/29~1/3)臨時休館日

静岡科学館 る・く・る ■住所/〒422-8067静岡市南町14番25号エスパティオ8~10階
■TEL/054-284-6960 FAX/054-284-6988
■ホームページ/http://www.rukuru.jp

案内図



※JR静岡駅より徒歩1分
※専用駐車場はありませんので、公共交通機関又は近隣の駐車場をご利用ください。

From Editor

編集後記

◆気をつけてみると、街のところどころにお地藏さまや石碑がありました。安東村と呼ばれたところの名残を感じる落ち着いた街でした。

◆お宅を改築して手作りの物を提供するお店を開いたり、皆さん、豊かに生活を楽しんでいるようです。隠れた穴場が探せる街、ぜひ、お散歩してみてください。

◆皆様がお持ちの情報をもとに取材をしたいと思ます。ご意見・ご感想・情報をドシドシお寄せください。

参考・文献

- 『安東十三ヶ町郷土誌』安東十三ヶ町郷土誌編集委員会編集
- 『安東地区の研究』静岡市立安東中学校郷土研究部編集
- 『安東マップ』安東生きがい創造学習塾発行

■写真・資料提供
静岡県立静岡城北高等学校
海野幸正氏(静岡県写真協会会長)
杉山貞利氏(水のまち静岡をつくる会代表)
中山保氏

静岡文化情報「街かど」第23号

●発行(年2回)平成16年3月
●編集・発行(財)静岡市文化振興財団〒420-0031静岡市呉服町二丁目1-1 札の辻ビル6階TEL.054-255-4746/FAX.054-653-3501E-mail:bunshin@chabashira.co.jphttp://www.chabashira.co.jp/~bunshin/

●印刷株式会社パピア中央静岡市小島一丁目62番18号

外国映画のようなウェディング
すべてはふたりのために

邸宅 WEDDING
ST. ALCOTT GARDEN
セント オルコット ガーデン

- ・ガーデンパーティーのできる邸宅ウェディング
- ・市内最大級の独立型チャペル
- ・1200坪の大邸宅が貸切

お問い合わせ先/静岡市登呂5-19-38 TEL054-288-3388

創業以来、おいしさを守り育てて。 【東海軒創業115年・創立90年イベント企画】

大正3年前後のレッテルを復刻させ「幕の内弁当」「鯛めし弁当」を記念特価にて販売いたします。



日 時 平成16年4月6日(火)~8日(木)限定 11時より販売
場 所 静岡駅コンコース(東海軒売店裏側)
販売価格 幕の内弁当 115円(税込み) 3日間実施します。
鯛めし弁当 90円(税込み)

駅弁の **東海軒** お会食に **東海軒会館**

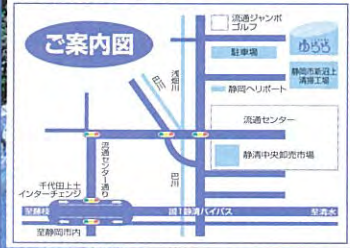
〒420-0852 静岡市紺屋町9の12 TEL253-5171

〒422-8067 静岡市南町9番1号 TEL286-5101

おいでよ!ここはいつでも、健康な楽園!!



YURARA
ゆらら
http://yurarashizuoka.or.jp



P 350台 ●開館時間/10:00~22:00(日・祝日のみ20:00まで)
●休館日/毎週火曜日 ※異業連携工場の法定点検中は約2週間の閉館となります。

〒420-0905 静岡市南沼上1379-1 TEL:054-263-3456

車利用
東名静岡ICから約12km(約30分)
※55号線を東へ進み、行き止まりにあるカーブを曲がり長沼大橋を渡り、流通センター通りから左折してください。
東名清水ICから約12km(約30分) JR静岡駅前から約8km(約20分)
静岡バス千代田上土ICから約2km(約5分)

バス利用
JR静岡駅北口 こども病院線(2番線)にて乗車、流通センター入口で下車。
(流通センター入口より無料シャトルバス運行)
東静岡駅北口より 東静岡駅北口より無料シャトルバス運行
無料シャトルバス 東静岡駅発 9:20 10:20 12:20 14:20 16:20 18:20

区分	料金	
	大人	子供 3歳以上 中学生まで
1日使用券	1,200円	600円
夜間使用券(18時以降)	600円	300円
回数券(6回分)	6,000円	3,000円
団体使用券(15人以上)	800円	400円
3月使用券	9,000円	4,500円
年間使用券	25,000円	12,500円
	(60歳以上)	
	18,000円	12,500円

「ゆらら」は、隣接の清掃工場の余熱を利用した県内初のエネルギー循環型の温浴施設です。

春の静岡競輪は、話題がいっぱい。

Bicky

★専用窓口にて、併売場の全レース発売開始

高額配当Best5 (H14年11/30~H15年12/22)

年月日	R	的中組	払戻金
1 H15.8/11	5	4-9-6	2,134,910
2 H15.1/19	7	6-8-7	1,179,220
3 H15.9/27	11	6-9-8	1,062,080
4 H15.5/5	2	6-5-3	494,480
5 H15.8/16	5	2-6-8	452,600

平成16年2月現在

レース結果集電話案内

静岡競輪場外

2車単・3連単 0180-995-800
他の賭式 0180-995-801

2車単・3連単 0180-995-802
他の賭式 0180-995-803